愛知・朝日西遺跡

1　所在地　愛知県西春日井郡清洲町

2　調査期間　一九八四年（昭59）七月～一九八五年三月

3　発掘機関　㈶愛知県教育サービスセンター

4　調査担当者　遠藤才文・金原　宏・佐藤公保・小沢一弘・丹羽博・服部哲也

5　遺跡の種類　城郭・都市跡

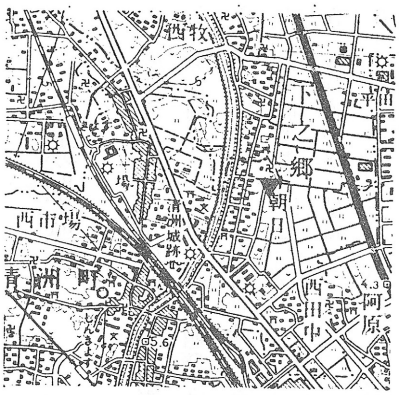
6　遺跡の年代　鎌倉～江戸時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

朝日西遺跡は、五条川東岸の自然堤防上に展開する中世～近世の複合遺跡であり、中世末の清洲城下町のなかでは、内堀と外堀の間に位置する。

発掘調査は、名古屋環状二号線建設に伴い、昭和五六年以降進められ今年度で終了する予定である。

五九年度調査区は、清洲城下町のうち町人地区に比定される地区（E～G区）と寺社地が推定される地区（A～D区）に大別できるが、木簡類の出土したSD一三（A・B区）、SD一一（D区）は、ともに寺社地区にあたる。



（名古屋北部）

SD一三は、南北方向からほぼ直角に東へ折れ曲がる溝であり、幅五m～六m、深さ三〇cm～一二〇cmを測る。溝中からは、多数の土器類の他、漆塗り椀、下駄、石製五輪塔・宝篋印塔の各部分などを発見した。五輪卒塔婆(1)～(5)は、溝が方向を変える地点の下層粘土中から、一九本が重なり合う状態で出土した。また、卒塔婆以外の文字資料として、「南無阿弥陀仏」と墨書された木簡、「文禄二年」（一五九三年）の年号が記された施釉陶器（黄瀬戸）椀がある。

SD一一は、南北方向に走る溝であり、幅約七m、深さ約九〇cmを測る。下層粘質土中からは土師器を中心とした土器類の他、多種多様の木製品（箸・折敷・杓子・曲物類・漆塗り椀等々）、さらには人骨（頭骨で四体分）、多量の獣骨類が出土した。木簡類はこれら遺物群に混在する状況で発見され、位牌と考えられるもの(6)～(10)の他、柿経の断簡、文書木簡らしいものがある。

これら木簡類の出土した二つの溝の年代は、卒塔婆（慶長三・四年、一五九八・九年）、墨書土器（文禄二年、一五九三年）の紀年銘資料から、或いは共伴遺物の年代観によって、清洲城下町が最も繁栄した一六世紀末～一七世紀初頭に考えられる。

8　木簡の釈文・内容

SD一三

(1)
「帰依仏法僧　南無六道　慶長四年
能化無仏　右志者為浄円禅門　敬
六月初七日　白」
678×85×1.6　061

(2)
「[illegible]　若人欲了知三世一切仏
三界唯心造應観法界性　矣為道西＝
[illegible]
＝[illegible]〔禅定門カ〕七□□
慶長三□」
(723)×95×5　061

(3)
「地水火風空　其後當作仏
号名曰弥勒　右志者　浄円□〔禅門カ〕敬
六月十四日　白」
678×85×1.8　061

(4)
・「□〔梵字カ〕水菊在月手□□□〔美花香カ〕七□
□□□衣〔龍カ〕□□□」
・「□〔梵字カ〕」
(630)×115×1.8　061

(5)
「五蘊本来空　文殊大□
十方諸□　右志者為浄□□□[illegible]
五月四日　白」
(685+74)×85×1.9　061

SD一一

(6)
「皈寂　斤公
慶公久々灵位」
191×27×2　061

(7)
・「物故宗見禅定門」
・「梅月浄白　」
187×27×2　061

(8)
「三界萬霊有縁無縁」
195×29×2　061

(9)
「物故者八郎殿十月十五日」
210×30×1.5　061

(10)
「源八殿
おなへ久々八月念三日」
240×30×1　061

(1)〜(5)は一九点出土した五輪卒塔婆（墨書が確認できたものは一四点）のうちの五点であり、追善供養の為の七本塔婆と考えられる。(4)は禅書に引用される漢詩で、宗派が禅宗であることを示唆する。(6)〜(10)は位牌であろうが、同様な例として他に六点出土している。これらの卒塔婆、位牌を他例と、或は近世以降の確立された書式と比較すれば、その形式、書式にそぐわない点が多々見うけられ、当地における近世直前の仏教文化を窺う上で貴重な資料と考える。

なお、木簡の釈読は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の全面的な御指導を得た。記して謝意を表します。

（服部哲也）